

第7回 レンギョウ

薬学事務課 嘱託技術員 鈴木 達彦

彫刻家・詩人の高村光太郎は生前レンギョウを好んだとされ、光太郎の葬儀には一枝のレンギョウが手向けられたという。光太郎は詩集『智恵子抄』中の「レモン哀歌」に、臨終の時を迎えた妻の智恵子にレモンを手渡したことをつづっている。レンギョウの花の眩い黄色は、「トパアズ(黄玉) いろの香気」を立たせたレモンにひけをとらない。

レンギョウはモクセイ科の木本植物で、生け垣や公園に植樹される。レンギョウの他に近縁のシナレンギョウやチョウセンレンギョウも植えられている。枝を折った時、中心の髓が中空ならばレンギョウ、膜質の髓があればシナレンギョウかチョウセンレンギョウである。また、シナレンギョウは幾分下向きに花を咲かせる。レンギョウの花は黄色の合弁花で、花の中を覗くと雌ずい(めしべ)を1つ、雄ずい(おしべ)を2つ観察することができる。いくつかの花を観察していくと、花によって雌ずいと雄ずいの長さが違うことが分かってくる。レンギョウの花にはオスの花とメスの花があり、オスの花は雄ずいを、メスの花は雌ずいを発達させ、役割を分けることで自家受粉を避けているのである。雌雄どちらの花を咲かせるかは通常株ごとに決まっています、メスの株とオスの株がある(雌雄異株)。

レンギョウの果実を乾燥したものを連翹れんぎょうといい、解毒、排膿、消炎薬として用いる。漢方の薬物書である本草書に、連翹は「瘡家(腫れもののできやすい人)の聖薬」とあり、腫れものや諸種の皮膚疾患に用いられる。レンギョウが配合されている代表的な漢方処方

には、柴胡清肝湯、荊芥連翹湯、龍胆瀉肝湯などが

ある。上に挙げた3つの処方方は中国の医書に記載されている元もとの処方ではなく、明治から昭和にかけて

活躍した日本の漢方家・森道伯もりとうはくが考案した我が国独自の処方である。森道伯は、患者の体質を、瘀血証、臓毒証、解毒証体質の3つに分類しており、いくつかの生薬の配合を考慮し、これらの解毒薬のように体質にあわせた処方を創ったのである。以後、森道伯の処方は定着し、保険診療に用いられるエキス剤としても採用されており、中国でも高く評価されるに至った。森道伯の見方によれば、解毒証体質の人は体の中に毒を持っていたり排出できない人で、そのため風邪や扁桃腺炎、結核にかかりやすくなる。いわゆる虚弱体質に、解毒薬を用いてその原因を治療したのである。

漢方の特徴として、体質に基づいた治療や体質改善をあげることは、今では一般的となっており、時には西洋医学が症状を抑える対症療法であることと対比させることがある。しかし、漢方が現在のように体質にあわせて治療するという明確な立場を示すようになったのは、近代に至っての森道伯の影響が大きい。さらに、森道伯の解毒法は小児から青年期まで、年齢によって処方を使い分けている。体質改善を目標とする時、小児から対応できることは優れた利点となる。現在では虚弱体質だけでなく、現代病ともいえるアトピー性皮膚炎等の体質の改善にも用いられている。

